

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00742

研究課題名（和文）対話的支援の多角的分析と支援対話メタデータベースの開発

研究課題名（英文）Multidimensional analysis of interactive support and development of a metadatabase for supportive dialogue

研究代表者

黒田 史彦（Kuroda, Fumihiko）

東京都立大学・国際センター・准教授

研究者番号：60579168

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：日本語学習アドバイジングと日本語アカデミック・ライティング支援の熟練支援者による模擬セッションを40回実施し、支援対話データを分析した。熟練支援者の持つ実践知を抽出して「パターン」として言語化して体系づけた。

日本語学習アドバイジングの支援対話データ（テキスト資料、動画資料）を分析した結果、21のパターンを抽出し、7つのグループにまとめることができた。日本語アカデミック・ライティングの支援対話データからは、26のパターンが得られ、5つのグループに体系づけることができた。抽出されたパターンは、模擬セッションの動画にキャプションとして書き込んで、データベース化した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語学習アドバイジングと日本語アカデミック・ライティング支援の熟練支援者が持つ実践知は暗黙的なものであるため、形式化が困難である。しかし、本研究において抽出し、言語化した実践知パターンを用いることにより、熟練支援者の実践知を広く共有することができる。

新規に対話的支援を始めようとする際には、実践知の蓄積がないために苦労することが多いが、本実践知パターンを拠り所とすることにより、短期間で支援力の増強が期待できる。

実践パターンは、自らの対話的支援の実践を振り返る際の「観点」となり、それまで気づけなかった特徴が見つかる。また、他の実践者とお互いの実践について話し合う際の「共通言語」にもなる。

研究成果の概要（英文）：In this study, 40 mock sessions were held by experienced supporters of Japanese language learning advising and Japanese academic writing support, and their dialogues were analyzed. We extracted the practical knowledge of experienced supporters as systematic "patterns." As a result of analyzing the dialogue data of Japanese language learning advising, 21 patterns were extracted and divided into 7 groups. From that of Japanese academic writing support, 26 patterns were obtained, and they were categorized into 5 groups.

The extracted patterns were written as captions to the video of each mock sessions and built as a database of supportive dialogues.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語学習支援 日本語学習アドバイジング 日本語アカデミック・ライティング支援

1. 研究開始当初の背景

日本語教育学の分野において、個人化学習(personalized learning)および適応学習(adaptive learning)の必要性は広く認識されている。同時に、学習者が自らの学びをデザインし、実現していく自己主導型学習(self-directed learning)の重要性も主張されてきた。学習者が個人化学習や適応学習を駆使できる自己主導型学習者へと成長する過程で、学習者の主体性を尊重しつつ、学習者個人に相応しい学びの創造を促すのが、個別的な学習支援である。分けても、学習者との対話を重視する立場の支援が対話的支援である。対話的支援において要となるのは、言うまでもなく支援指向の対話、すなわち支援対話である。

対話的支援における経験豊富なエキスパートである熟練支援者は、一人ひとり異なる学習者にどう対応すれば学習が成功するのか、経験的に知っている。熟練支援者は、学習者に多彩な質問を投げ掛けながら支援対話を展開し、学習者自身による学びの設計、実行、検証を促すことにより、自ら考え、決め、行動できる自己主導型学習者への成長を支援する。

熟練支援者が備えている支援対話実践上の経験則や秘訣とは、極めて暗黙的なもので形式化が困難であり、他の支援者が容易に真似できるものではない。この実践知とは如何なるものであるのか、そして、どうすれば実践知を共有することができるのか、本研究で問う。

2. 研究の目的

日本語学習アドバイジングおよび学術的文章の作成支援(日本語アカデミック・ライティング支援)の熟練支援者に協力を仰ぎ、対話的支援の実態を克明に記録する。記録した映像、音声、そして文字化した実践データをマルチモーダルに分析することにより、支援対話の特長をあぶり出す。さらに、熟練支援者へのインタビューを通じて実践知の言語化を試みる。加えて、経験学習論の立場から実践知のパターンを抽出し、体系化する。支援対話の実践データとその多角的分析結果を集約したメタデータベースを開発し、支援対話に関する研究および実践のための共用リソースとして一般公開する。そして、日本語教育分野における対話的支援の理念浸透と実践普及に結び付けることが、本研究における目的である。

日本語教育の分野において、個人化学習や適応学習の実現を導くことができ、自己主導型の学習者の成長を促すことのできる唯一の方法が、対話的支援である。対話的支援の普及によって、学習者の多様化で混乱する日本語教育の現場が安定すると言ってもよい。支援対話の実践知を言語化し、理論的に体系化しようという本研究は、混迷する日本語教育現場を導く現実的な指針となり得る。

3. 研究の方法

複数の熟練支援者が実践する支援対話の様子を、録画・録音し、本研究の元データとなる「支援対話データ」と位置づける。個人情報保護等の観点から、研究協力者として依頼した学習者たちを相手とする模擬セッションが対象となる。しかし、対話の話題は本物であり、実際の対話的支援と同様の手順で実施する。各研究協力者に対する模擬セッションを約1か月ごとに数回実施し、継続的に記録する。記録した支援対話データは文字起こしし、支援対話データの「テキスト資料」とする。詳細なテキスト資料を作成することにより、会話分析、談話分析、相互行為的社会言語学(interactional sociolinguistics)などの観点から、マルチモーダルな分析が可能となる。支援を指向した対話の展開、発問、傾聴、承認などといった支援対話の実態を明らかにし、その特長を多角的に洗い出す。

模擬セッションの録画映像を共に見返しながら、担当した熟練支援者にインタビューし、自らの実践を振り返ってもらう。発話の意図、質問の狙い、話題の展開、問の取り方といった意識的な行動はもちろん、無意識的な言語的・パラ言語的行動も含めて内省・内観を促し、実践上の秘訣やコツといった実践知の言語化を試みる。これらは、経験学習論における経験学習サイクルの「内省的省察(reflective observation)」および「抽象的概念化(abstract conceptualization)」に相当する。言語化された実践知は、録画映像上にキャプションとして書き込み、支援対話データの注釈付き「動画資料」とする。さらに、テキスト資料から得られた支援対話データの特長のうち、可能なものはキャプションとして注釈付き動画資料の中に盛り込む。

支援対話データおよびインタビューの分析により明らかになった多種多様な特長や実践知を分類・整理する。多くの熟練支援者が共通して採用している支援対話上の実践知を、経験学習論で言う「パターン」として抽出し、「実践知パターン」として体系化する。繰り返し現れる発話内容や言語表現、各種の言語行動、パラ言語行動はもちろん、思慮思考などの知的行動も実践知パターンとして認定する。得られた実践知パターンは動画資料の画面上に書き込み込んだうえで、検索機能を実装してデータベース化する。

4. 研究成果

本研究では、対話的支援の例として、日本語学習アドバイジングおよび日本語アカデミック・ライティング支援を取り上げ、熟練支援者による模擬セッションの実施、セッションにおける支援対話データの分析、熟練支援者の持つ「実践知パターン」の抽出に取り組んだ。

日本語学習アドバイジングに関しては、合計 20 回の模擬セッションを行い、うち 10 回がオンラインによるセッションであった。セッションにおける支援対話データ(テキスト資料、動画資料)を分析した結果、21 の実践知を抽出することができた。それぞれの実践知には言語化を施し、次のような実践知パターンにまとめたうえで、7 つのグループに編成し、体系化を行った。

- | | |
|-------------------|---|
| A. 学習者への接し方 | 01 一人ひとりの学習者
02 信じて任せる
03 カブける場 |
| B. 学習者との対話 | 04 よき聞き手として
05 考えるきっかけづくり
06 セッションの切り盛り |
| C. セッションの展開 | 07 今日の見通し
08 ひと時のチーム
09 まとめの時間 |
| D. 学習目標の設定 | 10 スタート地点の確認
11 未来の自分を描き出す
12 達成感の積み重ね |
| E. 学習計画の立案 | 13 合目的のプランニング
14 最初の一步
15 セルフチェック |
| F. 学習方法・学習リソースの活用 | 16 今までの学習方法
17 どんびしゃの選択肢
18 魚の釣り方 |
| G. アドバイザーとしての成長 | 19 引き出しを増やす
20 支援者だってふり返り
21 学習者としての体験 |

これらの実践知パターンの内、「G. アドバイザーとしての成長」は、アドバイジングのセッション内における言動に直接関わるものではなく、アドバイザーとしての資質向上のために常日頃から心掛けておくべき要点である。

日本語アカデミック・ライティングについても同様に、合計 20 回の模擬セッションを実施し、うち半数がオンラインによるものとなった。支援対話データの分析により、熟練支援者による 26 の実践知が得られた。それぞれの実践知は、5 グループに分類したうえで言語化し、26 の実践知パターンにまとめることができた。

- | | |
|---------------|--|
| A. 支援者の基本姿勢 | 01 書き手の選択
02 答を持っているのは書き手
03 書き手に任せる |
| B. 書き手への働きかけ | 04 しんいの発掘
05 考える時間
06 クイズタイム
07 気づきへのいざない
08 書き手の領域に踏み込む
09 伝えると引き出すのバランス |
| C. 雰囲気づくり・関係性 | 10 安心して話せる場所
11 よく聞く姿勢
12 ひとときのチーム
13 ゆとりの力 |
| D. セッションの組み立て | 14 セッションの切り盛り
15 スタートラインの確認
16 現在地の確認 |

- 17 ゴールの確認
- 18 静かなるフル稼働
- 19 いい塩梅の締め
- 20 まとめの時間

- E. 対応スキル、工夫、術（すべ）
- 21 対応の引き出し
 - 22 発想のスイッチ
 - 23 活かす・増やす・整理する
 - 24 木も見る、森も見る
 - 25 保留の効果
 - 26 忘れない工夫

抽出された実践知を整理し言語化した実践知パターンを、模擬セッションの動画資料にキャプションとして書き込んでデータベース化した。動画データを検索し、視聴することによって、熟練支援者による実践知パターンについて誰でも把握することが容易となった。また、暗黙的な実践知に形を与えた実践知パターンを公開することにより、支援者が自らの実践を振り返るための「観点」を得たり、他の支援者と実践について話し合うための「共通言語」として活用できる可能性が拓けた。



図1 キャプション例



図2 パターン検索例

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 黒田史彦・大森優	4. 巻 27-1
2. 論文標題 日本語アカデミック・ライティング支援のためのパターン・ランゲージに関する探索的研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語教育方法研究会誌	6. 最初と最後の頁 98-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 黒田史彦・大森優
2. 発表標題 日本語アカデミック・ライティング支援のためのパターン・ランゲージに関する探索的研究
3. 学会等名 日本語教育方法研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 黒田史彦
2. 発表標題 日本語アカデミック・ライティング支援者のための動画リソースの開発
3. 学会等名 早稲田大学ライティング・フォーラム
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	木下 直子 (Kinoshita Naoko) (40364715)	早稲田大学・日本語教育研究センター・准教授 (32689)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	トンプソン 美恵子 (平野美恵子) (Thompson Mieko) (20401606)	山梨学院大学・経営学部・特任准教授 (33402)	
研究分担者	大森 優 (Omori Yu) (60806991)	神田外語大学・アカデミックサクセスセンター・講師 (32510)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関